

ホールシティによるユネスコスクール・ESD/SDGsの推進

大牟田市教育委員会 前教育長 安田 昌則

- ・ 講演日時：2021年12月17日（金）17時から18時
- ・ 会場：創価大学教育学部棟B101教室

みなさん、こんにちは。座ったままで失礼を致します。先程紹介いただきました、福岡県大牟田市の前教育長の安田でございます。限られた時間ですので早口になるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひ致します。

まずは、創価大学の創立50周年、誠にめでとうございます。そのような意義ある年に、このように関田副学長先生はじめ、諸先生方にお招きいただきました。御礼申し上げます。本当にありがとうございます。また、先程紹介がありましたように創価大学はUnivNet（ユネスコスクール支援大学）ということで、日頃よりユネスコスクールへの支援をしていただいております。本当にありがとうございます。

それでは、スライドにあります演題のように「ホールシティによるユネスコスクール」、いわゆる市を挙げて大牟田市がどのようにESD/SDGsを推進してきたのかについてお話をさせていただきたいと思ひます。本日は簡単に大牟田の紹介とユネスコスクール加盟への経緯。そして具体的に市を挙げてどのようにやってきたのか。それからまとめに大牟田の取り組みの特徴という大きく3点の流れでお話をしたいと思ひます。

まず、大牟田市の紹介です。福岡県大牟田市は福岡県の一番南にございます。隣は荒尾市、熊本県の県境ということで小学校が19校、中学校が8校、市立の特別支援学校を持っております。ご存じのように、三池炭鉱があって、いわゆる石炭で栄えたまちでございますけれども、日本のエネルギーの転換ということで石炭から石油ということになりましたので、1997年（平成9年）にこの三池炭鉱は閉山をしております。ただ、その炭鉱関連施設が世界文化遺産の「明治日本の産業革命遺産」ということで、スライドのように3つ大牟田にはございます。



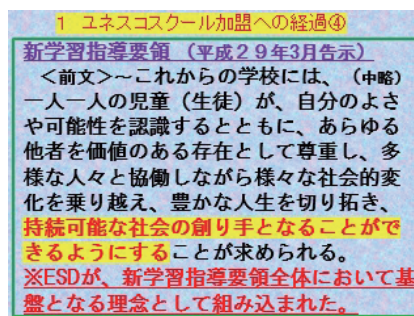
もう一つは、大牟田はカルタ発祥の地とも呼ばれております。と申しますのは、日本で一番古い天正カルタが発見されたときに三池住貞次という銘が出てまいりました。三池に住む貞次が作った天正カルタということで、当時の三池は大牟田を指しま

すので、大牟田をカルタ発祥の地と呼んでおりまして、全国唯一の公設のカルタ館がございます。

次にユネスコスクール加盟への経過についてお話をさせていただきます。先程申しました炭鉱で栄えた市で一番大きいときには20万の市でございましたが、平成9年に炭鉱は閉山し、現在11万、約半減しております。現在、少子高齢化で高齢化率は37.2%で、全国平均を約10ポイント大きく上回るまちでございまして、やはり炭鉱閉山後、新しいまちづくりを模索していた訳でございます。

持続可能な社会づくりを目指さなければならないという中で、ちょうど閉山した平成9年に私は指導主事になりまして、そのとき、当時の教育長さんが「これから炭鉱が無くなってまちは厳しくなる。しかし、大事なことは、石炭の火は消えても、教育の火は赤々と燃えていると。これでいこう。教育でまちを元気にしていこうと。」このように仰ったことが今でも忘れることができません。私は、その思いで、いろいろな取り組みをやってまいりました。ちょうど10年前に、東日本大震災よりも前になるのですが、文部科学省からユネスコスクール・ESDの説明がありました。

ちょうど当時の学習指導要領の改訂のときでございましたので、早速、教育課程検討委員会の中で、様々に検討をいたしました。まあ、ユネスコスクールって初めて聞きましたし、ESDがまず分かりませんでした。そこで、ユネスコスクール・ESDについて学びました。学習指導要領の中にも持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれていたこと、さらには、教育振興基本計画（1期から3期ありますけれども）その中にもESDが明記をされていたということ。ちなみに、このスライドは現在の学習指導要領ですけれども、現在の学習指導要領の前文の中には持続可能な社会の創り手となることができるようにするというように、ESDが新しい学習指導要領の基盤となり、理念として組み込まれたということでございます。



いずれにしても、ユネスコスクールがESDの拠点ということですが、このESDのSDということは、将来の世代も現代の世代も充足をする満足する社会ということであり、持続可能な社会の担い手を育む教育がこのESDであるということを確認をいたしました。そして、持続可能な社会づくりには、気候変動・国際理解など、地球規模の課題を学習テーマとしながら“think globally, act locally”ということが大事だということも当時皆で学んだわけです。

ユネスコにおける教育の理念は「21世紀の教育」という中で示されていますように、①learning to know ②learning to do ③learning to live together ④learning to be ということで、このような教育の理念についても確認をいたしました。また、当時ま

だユネスコスクール加盟前でしたけれども、各学校では、環境・国際理解等の様々なテーマで学習し、特色ある教育活動を行っていたということもございます。このように、ユネスコスクール・ESDについて、十分に教育委員会も検討したわけです。

しかし、実はユネスコスクールというのは、学校側が加盟申請していくわけでございます。

したがって、教育委員会がトップダウンでユネスコスクール加盟を進めたとしても、それは現場の方で学校が本当に理解しなければ、これは絶対持続可能にはならないと考えました。そこで、加盟申請について十分に小学校の校長会・教頭会、中学校・特別支援学校の校長会・教頭会で検討していただきました。校長会・教頭会の中では様々に意見はあったそうです。しかし、最終的にやはり、大牟田をなんとか持続可能なまちにしていこうという思いで、そして、このユネスコスクール・ESDの理念が大牟田の今後のまちづくりの考えと一致するということで、校長会・教頭会でも全校で加盟しようということになりました。そこで、教育委員会として全面的な支援をする、一緒になってやっていこうということで、全校一斉に加盟申請をしたわけでございます。

ちょうど申請して一年半くらいかかりまして、ありがたいことにパリのユネスコ本部から2012年の1月です、全ての小・中・特別支援学校が一斉に加盟承認されたということで連絡がありました。本当にうれしかったです。そこで、当時は市内の全公立の学校が一斉にユネスコスクールに加盟することは珍しいということで、ユネスコスクール関係の方から「ユネスコスクールのまち 大牟田」ということで取り組んだらどうかという、アドバイスもございましたので、私どもは、「ユネスコスクールのまち おおむた」ということで、のぼり旗を作りまして、そこから進んだわけでございます。また、子どもたちが大牟田に誇りを持って持続可能なまちの創り手になるということを目指しながら、進んだわけでございます。そのときに全国のESDの先駆者・実践者の方と出会ったわけですが、特に東大の及川幸彦先生には、10年間にわたってご指導を頂いているところでございます。

そこで、学校の取り組みですが、やはりどうすれば持続的に継続的に取り組むことができるかということで、まず、各学校には教育課程の中にきちんとESDを位置付けることにしました。つまり、ある先生が頑張っていなくなったら衰退するとか、そういうことではなくて、いつでもどこでも誰でもできるようにするためには、やはり教育課程をきちんと整理しなければなりません。そこで、全体計画なり学年ごとの年間計画、いわゆる、ESDカレンダー、年間計画をきちんと作って



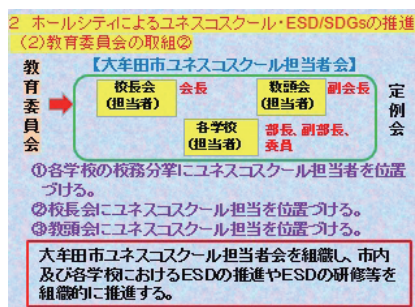
位置付けました。そして、次に、校務分掌にユネスコスクール担当者というものを明確に位置付けるということにいたしました。そして、それぞれの学校がテーマを設けて取り組むということにいたしました。

年間活動の計画としては、例えば、明治小学校では、エネルギー・環境ということを中心としながら、各教科等との関連を図りながら作りました。このスライド（右図）は吉野小学校のESDの「ストーリーマップ」です。これ、単元計画です。単元を考えていくときにやはりきちんと、各教科等の関連を考えていくということ、年間計画さらには各単元の計画・ストーリーマップというものを工夫しながら具体的に指導していくということで考えました。特に、「ストーリーマップ作成を通じた授業づくり」では、やはり目指す子どもの姿を明確にしなが



ら、そしてどのように資質・能力を育てていくか。それから、他教科等や地域とのつながり、また主体的な学びを生み出す体験的活動を工夫すること。先程の久喜小学校さんの素晴らしい発表の中でキーワードは主体的、そして当事者意識を持ちながら、ということでした。やはり私はそうだなと思って聞いておりました。

それから次に、市をあげたユネスコスクール・ESDの推進体制の構築についてお話しをさせていただきます。子どもたちが学び手となるために、具体的に教育委員会が教職員さらには地域関係団体をどのように支援し、連携を図りながらやってきたのかということです。まず、先ほど、各学校にはユネスコスクール担当者会ということで位置付けてもらいましたが、このスライドのように、担当者を市で集めまして、校長会の代表が会長、教頭会の代表が副会長、各学校の担当者の代表で部長さん等決めて運営し、そして教育委員会が支援をする。このような仕組みを作りました。各学校そして、市全体でやっていく仕組み作りということでユネスコスクール担当者会を位置付けていったわけでございます。

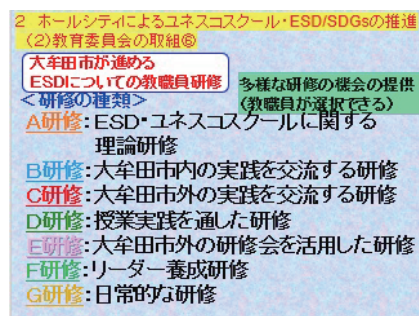


それから、教育委員会の学校教育振興プランで、これはどこの教育委員会も作るわけですが、その振興プランに基本理念としてESDを位置付けたということでございます。持続可能な社会づくりを担う子どもたちの育成ということで基本理念にESDを

位置付ける。あとは具体的な政策・事業に落としていくかということでございます。

また、教育委員会事務局の機構の中でESD/SDGsの担当を工夫するという事で、指導室、これはどこの教育委員会もあろうかと思えます。その指導室がきちんと担う。そして、さらには後で申し上げますが、「ユネスコスクール支援センター」を設置しました。それから、教育みらい創造室とってESD/SDGsに特化する指導主事を置きました。これは、市長さんをお願いしまして、市職員を削減する状況だったのですが、なんとか一人配置するという事で、割愛として現場の教員が来ております。

次に、市をあげてESDを推進するという事で、市長さんをお願いして、市役所の中にESD推進本部を作っていただきました。市長さんが本部長、教育長が副本部長、各部の部長さんが推進委員です。各部でESDの視点で事業を推進していただくという事で、持続可能なまちづくりという体制も、教育委員会だけではなくて市長部局でもきちんと取っていただきました。次に、やはり教育委員会として、学校への支援として先生方がESD/SDGsを進めていくというのにはやはり教員研修というのが大事になってくるだろうと考えました。ただ悉皆研修といいます



か、強制的に行うのではなくて、このスライドのように、たくさんのメニューを設けました。その中で先生方が自主的に選んで参加していただくということで、A研からG研という理論研修であったり、具体的な実践の研修であったりとか、このように多様な機会の研修を提供し、先生方が選択して参加していただくことにしました。ただし、初めて大牟田に来られた新採の先生、それから他郡市から大牟田に来られた先生方は、必ず研修を受けてもらいます。そうでないと、差が付きますので、本市は皆でやるということで、そういう面での研修をしております。さらに、マスターティーチャーという、ある程度実践を重ねた中核メンバーを次の人材、リーダーを作っていくということで、「マスターティーチャー養成コース」も設けております。

この他、全国の実践交流会も行っておりまして、コロナ禍でも規模を縮小して全国の先生方も参加していただいて開催してきたところでございます。それからやはりESDを推進する教師ということで、大牟田市の場合には3つの観点から先生方の姿を模索しております。1点目は人間性、そして2点目は専門性、さらに3点目は協働性という3つの観点から、このように5つの力。具体的には、やっぱり実践をしていかなければならないわけですので、カリキュラム・マネジメントが大きくなると思えますけれども、このように私どもはESDを推進する先生の姿を確認しながら、研修を多様にしていくという事で取り組みをしております。何よりも大事なことは、教師として熱い思いということですね。先生方が「次の世代を育てていくのだ、そして、持

「持続可能なまちにしていこう」という熱い思いがなければ、テクニックだけではダメだろうと思っております。

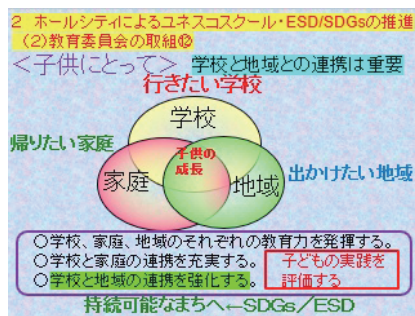
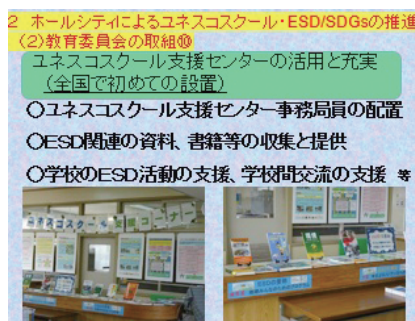
あとやはり、全職員で進めていくためには情報の共有が必要だろうということで、「ユネスコスクール便り」という、毎月A4一枚ですけれども、全教職員に配布しております。ユネスコスクール担当者が分担をしながら、紙面の左側が理論であったり、全国の流れであったりとか、紙面の右側は各学校の具体的な取組について掲載し、毎月全教職員に配布しております。

また、教育委員会としては、パンフレットや手引きなどを作って、全教職員に配布して具体的に活用していただくということを支援しております。さらに、先程申しました「ユネスコスクール支援センター」を設置して具体的に学校の相談に乗ったり、情報を提供したりしています。このときも、市長さんに何とか事務局員を置いていただけないかをお願いをして、元退職された校長先生が今一人このユネスコスクール支援センターで事務局員として務めていただいております。

やはり、ESDで大切にしたいことは、つながりに関わりだろうと思います。そのために、連携・連帯・協働、今は共創という時代ですけれども、つながっていく、関わっていく。そういういろいろな団体さんとも、つながり関わりを持っていく。大事なことは、一人一人との関わりを大事にしていこうということで、子どもたちにとって、行きたい学校・帰りたい家庭・出かけたい地域という、この3つ（学校・家庭・地域）の教育力というものは大事なものだろうと思います。

そこで、特に学校と地域の連携をやはり強化しなければ地域課題といってもなかなか具体的な実践、また、いろいろな体制は取れないということです。そこで学校と地域の連携を強化するという目的で、様々な支援もしてまいりました。具体的には、地域のESDの講座をそれぞれの地区公民館で行う、また、団体さんが希望されるなら出前講座ということで、地域へのESD講座を行ってまいりました。

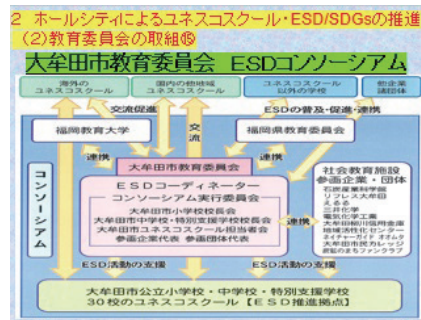
また、関係団体にも出前講座ということで、例えば、PTAの役員会とか商工会議所であるとか経済倶楽部さんだとか、いろいろな団体さんにも出前講座を行いました。そういう中で、大牟田のESD推進協議会というものが立ち上がりました。側面的に学校を支援していこう、また、大牟田の市民のESDを推進していく、その役割を



担っていこうという推進協議会というものが立ち上がりました。

関係団体さんとは、例えばNPOであるとか、いわゆる企業さんであるとか。それから、当然市の部局であるとか。それから、各校区の協議会であると、そういう様々な団体との連携を図りながら各学校へ支援をしていただく。そういう橋渡しも教育委員会の方でさせていただくということで、これまで取り組みを進めてまいりました。

あとは、やはり、先程申しました「つながり・関わり」ということでコンソーシアムというものを構築しました。ちょうど、文部科学省からそういう事業の公募がありましたので、その事業に応募して採択され、それを契機にコンソーシアムを作りました。例えば、大学であるとか、それから、様々な地元の企業であるとか、諸団体、そういうたくさんの団体の方々と一緒にESDを進めていくためのコンソーシアムということで取り組んでまいりました。



それから、子どもたちがユネスコスクール・ESD/SDGsを学ぶためには、自分たちの住んでいる郷土をきちんと知るといこと。それは、やはり知るからこそ、それが理解されて誇りに思うだろうと思うのです。そういう面で教育委員会として「子ども大牟田検定」を始めました。検定ということですが、子どもたちにガイドブックを配布し、大牟田の歴史・伝統や文化というものをしっかりと学ぶ。そして、長期の休みの夏休みと冬休みの終わった後に、年2回ですが大牟田検定を受けるというようにしています。市内の全小・中・特別支援学校の児童生徒は受検していますが、市内の高等学校の生徒さんも今は受検をしていただいております。私どもは、地域で学んだことを誇りを持って語れる子どもを育てたいということで、「3つの誇り」と言っています。それは、「1点目は、地域の歴史・文化や自然そのものの価値に対する誇りを持ってもらいたい。2点目は、その歴史・文化というものは、やはりそういう創り育てて継承するための工夫や努力をしてきた人がいたと。その人に対する誇り。3点目は、それを今度は自分たちが受け継いで、そして発信して将来に向けて守り育てていくことの誇り。」この3つの誇りを子ども達にはもってもらいたいということで、このような「子ども大牟田検定」という取り組みを進めているところでございます。

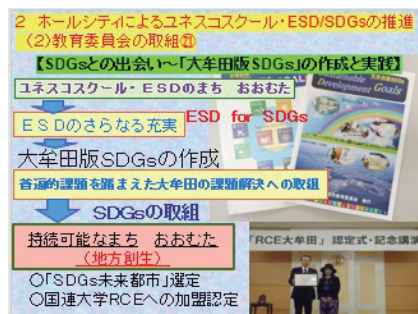
あと、大事なことは学校からまた教育委員会からユネスコスクール・ESDを発信するために様々なやはり啓発をしなければならないということです。ホームページであったり、それからチラシを配ったりとか、今日お手元に大牟田市が作成したチラシがございませけれども、こういうチラシを保護者とか、それから関係団体さんにお配りをして、啓発をしています。教育委員会のホームページにもきちんとユネスコスクールに関するホームページも設けています。ビジビリティをどのように向上させて

いくかということ、大事なことだろうと思います。それから、校長会でも各学校のホームページのところに「大牟田市ESD/SDGs実践アーカイブ」というものを作っております。このように、校長会で作っていただいております。それぞれの学校のホームページから見ることで、それぞれのテーマごとに整理されておりますので、もしもよろしければ、御覧いただければありがたいと思います。

次に、ESDを進めて行く中でSDGsに出会ったわけでございます。ご承知のように、国連が2015年に定めた持続可能な開発目標(SDGs)ということで、SDGsの中でこのSDGsにおけるESDの役割ということは、国連も言っておりますけれども、「教育が全てのSDGsの基礎であり、全てのSDGsが教育に期待をする」と。であるならば、ESDを推進することが、SDGsの達成に貢献するというところで、私どもはこのようにESD/SDGsに現在、取り組みを進めているところでございます。



そこで、「大牟田版SDGs」というものを作りました。スライドのようなものですが、これはバージョン2です。具体的は大牟田が考えるSDGsはどういうものかということで作っております。「普遍的課題を踏まえた大牟田の課題解決の取り組み」ということで、具体的にSDGsが市の施策のどこにあたるのか、それから、教育委員会の施策のどこにあたるのか、また学校はどのように具体的に実践しているのか。さらに、それを通してどのような子どもを目指していくのか。このような内容で「大牟田版SDGs」として作ったところでございます。そして、地道な地方創生の取り組みを進めているということでございます。

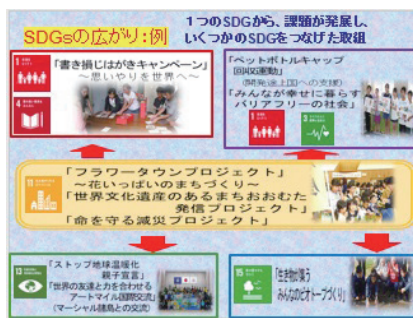


そういう中で、「SDGsの未来都市」にも選ばれましたし、それから、私が教育長を退任する一か月前の2月に、国連大学のRCEにも認定を受けることができました。全国で8番目の国連大学RCEということでございます。国連大学RCEとは、ESDを推進していく地域拠点ということで、国連大学が認定するということになっておりますが、「RCE大牟田」として国内8番目の認定を受けたということでございます。

さて、そこで、SDGsを目指したESDを推進することで、どんな期待があるのか。これは東京大学の及川先生からご指導を頂いたわけでございます。1点目は、「SDGsによって、自分自身のESDの活動の新たな意義や価値づけを行うことができ、ESDの

活動の目標を明確にすることができる。」2点目は、「SDGsは人類共通のグローバル目標なので、それを意識してESDの活動に取り組むことは、地域に根ざした身近な活動が世界につながることであり、地球規模の課題解決に貢献することができる。」ということで、私どもはESDを推進するということでのSDGsへの効果として取り組みを進めている

ところでございます。それから、一つのSDGの目標に向かって実践をするということもそうなのですが、今、大牟田市で考えていることは、一つのSDGから課題が発展していく、いくつかのSDGをつなげた取り組みができないかということです。例えば、「フラワータウンプロジェクト」は、11番目のSDGですが、それが発展して、例えば書き損じはがきのキャンペーンで1番目のSDGであるとか、それからペットボトルの回収活動とか、それから地球温暖化、さらにビオトープとか。このように、一つのSDGからいくつかのSDGをつなげた取り組みということで、今広げているところでございます。



あと、「SDGs大牟田MAP」というものを作りました。各学校がどのようにSDGsを重点として取り組んでいるのかということを表しています。市内のSDGsの取組が一目で分かるように作りまして、学校だけではなくて、市内の例えば、銀行さんであるとか、いろいろな企業さんにも貼らせていただいて、このように各学校ではSDGsに取り組んでいますよということで、紹介そして啓発をしているところでございます。そういう中に、ありがたいことに「第3回のジャパンSDGsアワードの特別賞」を受賞することができました。教育委員会の受賞は全国で初めてということで、安倍総理の時ですけど、首相官邸で直接賞状を頂くことができました。この受賞は、地元にとって大きな励みとなったところでございます。



そこで、SDGs/ESDは大牟田にとってどういうことなのかということをもとめています。大牟田の学校では、SDGs/ESDとは、子どもたちが地球規模の、また大牟田の課題を自分の問題として捉えて、次です、自分なりに考え、行動すること。先ほど久喜小学校さんもそうでしたね、自分なりに考えて、自分ができることから行うというところが大事なことではないでしょうか。“Learning to transform oneself and society”と、「自分自身と社会を変容することを学ぶ」これがESDであり、SDGsに取り組むことであろうと思います。

次に、いくつか各学校の実践例を紹介したいと思います。初めに、これは吉野小学校が取り組んでいる、桜を通して地域と連携した「桜プロジェクト」なんです。桜の木を校内だけではなくて、地域に植えていこう、桜がいっぱいの校区にしていこうと桜を通した、いわゆるまちの活性化への実践です。このプロジェクトは、学校から始まったのですが、地域の方も賛同していただいて、地域と盛り上げていく、一緒になって行うということです。現在、校区に23本の桜の木が植えられています。しかし、市の許可がないと桜を勝手に植えられませんので、地域が管理をするということも含めて、地域の方々が行うということでございます。桜を通した、いわゆる地域の活性化の実践例です。



2つ目は、大正小学校の「フラワータウンプロジェクト」です。花を通して地域を美しく、そして笑顔の咲くまちということを目指しているところでございます。コロナ禍であっても、この花の活動はできるわけでございますので、今取り組みを進めているところでございます。

3つ目は、中友小学校の「子ども民生委員」という取組です。校区の民生委員さんの方から子どもたちに委嘱状を出していただいて、ちゃんと自覚を持って、あなたは民生委員だよ、子ども民生委員だということで、チョッキと帽子をかぶってですね、もちろん民生委員さんと一緒に高齢者の方のところに行きます。下の写真は、認知症の方がやはりまちを歩いて行かれるとついつい道がわからなくなってしまう、その時にどのように声かけをすればいいかという模擬訓練をしている様子です。

それから4つ目は、農業・食育を通したまちづくりです。大牟田は干拓されたまちで、そのような地域が多いわけです。そこで、その干拓地での農業を、地域と共同農園を作って、有機栽培で野菜を育て、そしてそれを「子ども朝市」で売ったりしています。それから、米作りから発展し伝統芸能で「米はかり踊り」というものを継承しているところでございます。

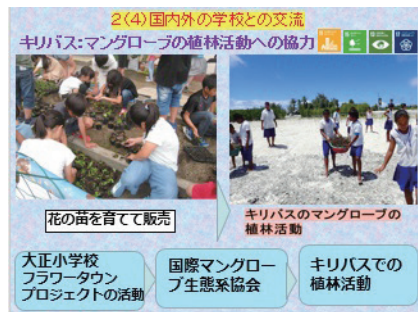
あと5つ目に環境学習ということで、大牟田はかつて公害を体験しておりますので、そういう環境を通したまちづくりということで様々に取り組みを進めております。創価大学の創立者の池田先生は、環境ということについて「環境を大切にすることとは、生命を大切にすることであり、未来を大切にすることである」と仰っておられますけれども、まさに環境を通したまちづくりにも取り組みを進めているところでございます。

この他、国際的な枠組みへの取組ということで、2021年から10年間ですが「国連海洋科学の10年」が始まりました。これはユネスコのIOCが進めていますが、この「国

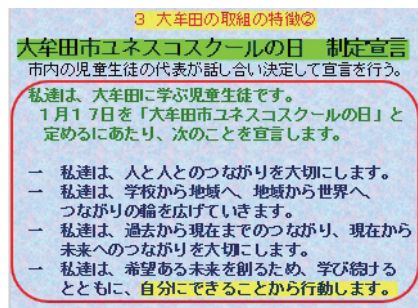
連海洋科学の10年」の取組に大牟田も参加をしております。具体的には、東京大学と連携を図って、有明海から世界の海へということで、有明海は内海で、干拓と干満の差が一番大きい海です、この有明海には三池港があり、三池港は世界文化遺産、稼働資産で現在もまだ動いておりますが、そういう有明海、三池港を中心とした海洋教育も進めております。特に、先ほど申しました「国連海洋科学の10年」では「海洋リテラシーの育成」というものを目指しておりますので、それについても今、大牟田市としては「海洋リテラシーの育成」の年間計画を作って、副読本を作り、具体的に取組を進めているところでございます。



さらに、様々な国内外との交流ということでこのように全国の学校との交流、中学校との交流、特別支援学校との交流を行っておりますし、海外とも行っております。例えば、マーシャル諸島とは、地球温暖化をテーマに交流しております。また、大正小学校はキリバスのマングローブの植林活動に支援をしております。具体的には、子どもたちが花の苗を育てて、それを地域の方に販売します。そして、その収益金をキリバスに送り、キリバスのマングローブの植林活動に支援をしていくということでの交流が始まっております。



それからやはり、子どもたちの日頃の実践については、中々ほかの学校の実践を見ることができませんので、「大牟田市ユネスコスクール子どもサミット」を毎年1月に行っております。市内全部で28校ぐらい学校がありますので、一度に全部は紹介できませんので、毎年8校ぐらい分けて発表することになっております。それから、ユネスコスクールの日を制定しようということで、1月の17日に決めました。全校一斉に加盟した日が1月17日なのです。実はこの日は阪神淡路大震災の1月17日ということで、私どもがそのことも忘れることなくきちんと考えていこうと、あえて1月17日を、大牟田市の「ユネスコスクールの日」と制定をいたしました。その時に、制定宣言を子どもたちに考えさせました。制定宣言の4番目が、「私たちは、希望ある未来を創るため、



学び続けるとともに、自分にできることから行動します」ということを子どもたちが考え宣言を行ったところでございます。

また、ちょうど大牟田市が市制100周年を迎えたときに市長さんが、「ユネスコスクール・ESDのまち おおむた」宣言をすると仰いました。式典では市長さんをはじめ、市議会の議長さん、地元の企業や地域の代表の方など、皆さんにお集まりいただきました。

これまで本市のESD/SDGsの取組をお話ししてきましたが、大牟田の特徴はこのように8点でございます。やはり、1点目は、教育を中心としたまちづくりへの熱い思いというもの。2点目は、ホールシティによる推進体制。3点目は、系統的・持続的な実践。4点目は、委員会の着実な施策の展開。5点目は、継続した人材育成。6点目にやはり全国の専門家・実践者から指導を受けたということ。7点目は、全国の様々なステークホルダーと連携を図ったこと。そして、8点目は、国内外の教育委員会・学校等との交流を図ってきたことが、これまでの本市の10年間の取組の特徴であると思います。何よりも嬉しかったのは、10年前に当時中学校3

3 大牟田の取組の特徴④

- (1)教育を中心とした持続可能なまちづくりへの思い
- (2)ホールシティによるSDGs/ESDの推進体制
- (3)ユネスコスクールの系統的・持続的なSDGs/ESDの実践
- (4)教育委員会の着実なSDGs/ESDに関する施策の展開
- (5)継続した人材育成(ESD/SDGsマスターティーチャー、ESD/SDGs研究所員等、多様な研修)
- (6)全国のSDGs/ESDの専門家・実践者からの指導
- (7)全国のステークホルダーとの連携
(共創によるSDGs/ESDの推進)
- (8)国内・海外の学校や教育委員会等との交流
(学びの場の共有)

年生の女の子が「ESDに出会って自分の人生変わった。ESDは大事だ。教師になって、次の世代にESDを繋ぎたい。だから私は教師になりたい。」ということで教師を目指されたそうです。その子が、本当に大学に行って福岡県の採用試験を受けて合格され、2年前に大牟田に着任されたのです。本当に嬉しかったです。あるとき、当時の担任の先生が、いや実はこういう生徒がいる、先生がいるということで紹介された先生がこの方なのです。本当に嬉しかったです。こうやって、子どもを育み人材を繋いでいかなければならないのだと思ったところでございます。

最後に、21世紀の社会というのが、このようにVUCA時代、「不安定、不確実、複雑、不明確」のVUCA時代。さらには、第4次産業革命の時代、さらには皆さんご存じのように、Society 5.0 の時代です。やはり現在は混迷する時代であり、地球規模の諸課題があります。このような社会であるということは間違いない。

そのような中で、OECDも「Education 2030 プロジェクト」というのが始まっておりますが、その中に、変革を起こす力のあるコンピテンシーということで3つ言われています。「一つ目は、新たな価値を創造する力。二つ目に、対立やジレンマを克服する力。三つ目は責任ある行動をとる力。」これらがOECDで目指しているキーコンピテンシーです。これを私は見たときに、ESD/SDGsの役割というのは大きな役割があると思っております。

「ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏に飛び立つ」この言葉は、ドイツのヘーゲルの『法の哲学』の序文の一節です。一つの時代が終焉を迎え、古い体制や考えが通用しなくなった時を黄昏に、新しい時代、新しい知恵を求めて時代を切り拓いていく者を梟に例えました。このヘーゲルが言った言葉を踏まえ、まさに今混迷する社会にあって、新しい考え方、新しい思想で考え、取り組んでいかなければならないと思っております。その一つとして、やはりESD/SDGsというのは大きな役割を担って行くのではないかと思っております。深く深く思索をし、具体的に実践をしていく。この思索と行動の往復運動が私は大事だろうと思っております。

私が吉野小学校の校長の時に先生方に示したESDの学びの中で、子ども一人ひとりの力を発揮するために大事なことは、過去・現在・未来という時間と地域・日本・世界という空間の中で子どもたちが学んでいかなければならない。そのESDの価値というものがあるだろうと。例えば、共生であったり、生命尊厳であったり、尊敬であったり、自他共栄である。たくさんの方に報恩感謝しながら、子どもたちが、未来に向かって進まなければならない。その根底にあるのは、「他人の不幸の上に、自分の幸せを築かない」。創価大学の創立者の言葉ですが、私は価値として大事にしていかなければならないと思っております。

また、大事なことは、今、地球規模の課題というものがたくさんあります。しかし、ややもすると、やっぱり重たいのです。気候変動ですとか。それに立ち向かって行かなければならない時に、大事なことはやはり「希望」が大事だと思います。今年の創大の大学祭のテーマにも「希望」という言葉が入っていました。創立者は、その「希望」に対して、



メッセージの中で3つの観点で述べられておられました。要約すると、1つ目は、「忍耐、それから執念」、2つ目は、「信頼、友情」、3つ目は、「価値創造」ということを述べられたわけです。まさに現実は厳しいのですが、「希望」というものを持ちながら、そして、具体的に自分たちができる行動から進めなければ、私は持続可能な社会にはならないと思っております。そういう面で、今日はたくさんの方のユネスコスクール関係者の皆さんもいらっしゃいますし、それから何よりも有難いことには冒頭申しましたように創価大学はユネスコスクール支援大学でございますので、これからもみんなと連携を図りながら、子どもたちが持続可能な社会の創り手となるように希望を持ちながら頑張っていきたいと思っております。

長時間ご清聴ありがとうございました。

